

学生の意識にみられる協同学習の有用性—アンケート調査とインタビューを通して—

小原 弥生(尚美学園大学)

1. はじめに

本発表はペア活動・グループ活動などの協同学習を取り入れた英語の授業で学生の声をとらえて、質的にまとめたものである。小原(2016)では、成績の伸びの結果を英語習得能力別、すなわち上中下別に量的方法で分析・考察し、下位の学生が最も伸びたという結果になった。本発表では、ほぼ同じ学生を前期のペア音読、ペア活動にグループ活動、プレゼンテーションを新たに追加した授業を扱う。協同学習をテーマに、主に記述式アンケートやインタビューから質的方法で学生の実態を報告したい。

2. 先行研究

これまで実証主義的な「量的な研究」が主流を占めていた。しかし、大谷(2008)は、数量的に計測できるものだけに意味があるわけではないという。したがって、量的に加え、質的な面からの分析・考察も学生の本質に迫るために必要かと考えた。

Johnson, Johnson and Smith (1998) は、協同学習の大学での使用は社会的相互依存の創造、認知的発達と行動的学習理論にその根を持っていると述べており、協同学習に重大な 5 つの基本的構成要素を主張している。それらは(1) positive interdependence(肯定的な相互依存)、(2) individual accountability(個人責任)、(3) promotive interaction(促進する相互作用)、(4) social skills(社交術) and (5) group processing(集団の改善手続き)である。

3. 研究の方法

対象学生は、埼玉県内の大学 1, 2 年生、英語を専門としていない学生 51 名で、英語を苦手としている学生が多い。期間は 2015 年 9 月～2016 年 1 月である。参加学生のそれぞれの音読に対する感想や意識を見るために、アンケートを作成し、1 月に実施した。アンケート実施後、上位、中位、下位のそれぞれから 1 名、計 3 名の学生を抽出し、同意を得た上で、半構造化インタビューを行った。データ分析法は、Grounded theory approach を援用して行った。

4. まとめ

アンケートでは、ペア、グループ活動について、評価し、その理由や感想を書いてももらった。その結果では、ペア、グループ活動は、協同学習の上述の 5 つの基本的構成要素を満たしていた。個別のインタビューの結果からは、アンケートに記述できないことや全体から見えないものが見えた。全体的なアンケートではペア、グループ活動は歓迎されているが、中には負い目を感じる学生、グループに寄与していない学生も見られた。

5. 引用文献

Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Smith, K. A. (1998). Cooperative Learning Returns To College: What Evidence Is There That It Works? *Change*, July/August 27-35.

大谷尚(2008) 質的研究とは何か--教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして. 教育システム情報学会誌. Vol.25, No.3, 340-354.

小原弥生(2016) ペア活動を中心とした音読指導の影響—学力テストとアンケートの結

一般研究発表② (1054 教室) 12:55-13:25

果から—「英語教育研究」.(関西英語教育学会紀要) No.39. 37-56.